

青戸白虹編
落穂集

例言

本書は、主として、過去一年間よ於ける、余及び余が知友の詩歌を採録し、まゝ四五年前の舊作をも收めたり。素より我ら白面の兒、詩歌の領に入るべくもあらず、之れを梓よ附して世よ問ふは、罪余に在り、矧んや、事勿忙の裡に成り、取捨その宜を失し、誤脱またこれあるべきよ於てをや。

我らは、切に、江湖同情の士が、嚴肅ふる訓戒を、惜まざらむ事を望む。

明治三十六年三月十八日

編者識

目次

地なる歎き	二
鶏肋	一三
野分	二四
ひとと夜	二八
松籟	三〇
白芙蓉	四四
こぼれ梅	四七
残光餘影	五二

落穂集

青戸白虹編

もろもろの天は神の榮光をあらはし、
 穹蒼はそのみ手のわざをしめす。この
 日こそばなかの日よつたへ、このよ知
 識をかゝの夜にたくる。語らすいはすそ
 の聲きこねざるに、そのひときは全地
 よあまれく、そのこそばは地のはてよ
 まであれよぶ。
 詩、第十九篇、一―四。

光	蝶	短	野	花	病	鳩	低
と	よ	笛	の	牀	牀	の	
暗	與	長	聲	雜	歌	歌	唱
	ふ	鞭	雀	詠	壁	畫	
			に	環	畫		
			與				
			ふ				
一三四	一三二	一一五	一〇四	九二	七七	七一	五七



青戸白虹

き歎るな地

罪の子われ鎖してけむか天の戸を愁ぞ長き
夕みだれ髪

宿世とぞそれよ葡萄の濃紫こゝなる子らは
神の名よ居り

風悲しうらぶれ雲よかげ低しわれや野末の
石とならむ思

戀や名やわれや人やの夢うつゝ野末の闇に
笛吹き鳴らせ

闇を縫ふ渡良瀬川の水瘦せて岸よ枯芦空に
愁ひの雲

名に酔ひぬ黄金に酔ひぬ戀よ酔ひぬかくて
神秘の門鎖されぬ

護國寺の木の葉亂れて飛ぶ方よ世に嚴めし
き巢鴨監獄

これ運命縁は終ゝ天のもの怨みじ泣かじさ
てさりながら

あな寂しこれや悟りか二十とせを戀せぬ君
は聖なるもの

藝術の子こゝなる二人よりそひて夕灯影の
暗きよ泣かむ

こゝもとに歌は降れゝどひろひ得ぬ無才よ
床に秋を詫ぶる子

日記くれば憂きこと更に胸をゐてせんすべ
しらに秋黄昏るゝ

うしやわが秋野のみだれ低き聲君よきかせ
む歌にあらずよ

よくらしのみ聲はことに高かりきサキソニ
少女惑ひあらずな

このまゝに焔ともなれ常闇に流れても往け
軀なにせむ

賜ひつる白梅の花
バイブルのなかよはさみ
て枕邊よあり

人はいざ狂へな戀へ
あ争へな不斷の灯われ
ぞかゝげむ

聖逝きて千九百年さ
かしらよねせ人あまた
知慧を罵る

樂の音はしばしをや
みて方舞の振の袂よ梅
の花ちる

新らしき邦を建つべ
きますら男が惱むとい
はゞ君嗤はむか

いのりし君が眼のうる
ほひて顔のぞかる
る夕ぐれの森

このまよ朽ちて果つべ
き命あらず自由な
き家自由なき郷

かくと知らば年の緒
永く石擗ちて水よいつ
めと願はざりけむ

寧ろ我れ花の白きに與みせんか飛び往く胡蝶みちがら黒き

うちまじり子らの遊べる芝山よ振分髪の君もゐませり

慰籍は歌にしかじな妹が歌友が歌はた天つちのうた

我が想ひ繪よ描かくべくば指染めて蒼穹そらの巻物繪もて埋めむ

簪なきそは揚卷かものうつすこの子十七悔いを知らぬ子

あかときの野の道芝に置く露ぞけだし短く光榮あるいのち

濁世とは偽りある世曲れる世人のこゝろのくろき今の世

世といはず拙き歌よ人ひとり慰安なぐさめをねば足りあむねがひ

ましろなる出雲富嶽の朝姿寝みだれ髪か雲
の靡びける

あなつめた唯ひともの白梅に夕の春を紅
梅そのかき宿

築山に對るの振袖緋の袴さゝやぎ何ぞ志鶴
子と八千代

相笑みてさて語るべきことばあし小夜の寢
ざめに名よびし人や(以下二首人の病床に侍して)

緋袴よ野の草しきて樂の音をきゝぬとばか
りまた夢に入る

ほつれ毛の燈影にゆらぐ華やぎに樂譜うつ
す子眸まみうるはしき

星の世の人のまなざし耀ぎて髪やはらかく
肩を掩ふよ

戀すちと道説く若き聖にきゝぬ誰ぞや人の
子自ら欺く

鶏 肋

岡本星浪

我生空しからず

孤はなれを小島じまに田植するところ

晴の日小山の上よ登りつ

松が根に臥してながめやりぬ

湖は沈然として紺碧を湛へ

彼岸には聳ゆる静肅の山々

淡紫恰も浮ぶが如し

天色美嚴雲莊重

姿たかきしき汀の松も

言葉よあまる思を罩めたり

我この自然の大觀に感じて

靈魂たましひの座ろ造化よ融合するを覺わつ

我生空しからずとつぶやきし外は

また洩らすべき言の葉もなし

虹の歌

ひんがしの
夕づく日
仰ぎ見よ
さやかふる

時雨をやみて
今こゝろてらせ
虹のかけはし
その彩色を

熱帯の
北洋の
橋の上
橋の下

森より出で
浪にや消ゆる
天かぎりなく
亂れ湧く雲

湧く雲も
飛ぶ鳥も

避けて登らず
低くさまよふ

ゆゑしかる
何人か

神の妙工を
讃へざらめや

このにぶき
七色の
凭れ倚る
はるくくと

目にこそ見ね
高欄干に
少女もあらん
下界望みて

うつし世の
我も亦
辿り往く
一度は

夢し覺めなば
天の旅人
路のながてに
わたりに越えまし

冬の夕

雪降りつみし天地を
 我物がほよ吹きすすさぶ
 夕の風よわなふぎて
 しばし門邊に佇めば
 近き林のうしろより
 灰色の雲湧立ちて
 入日名残の紅と
 戦ふ如く入り亂れ
 入り亂れつうすれゆく

逍遙吟

秋の夕を 逍遙す
 十畝余の 裏の畑
 小菜は緑に 蕎麥白く
 西の境は むくげ垣
 入日のあとの 夕焼けて
 雲のきれぎれ いざよへば
 いぬゐの方の 森の闇よ
 古城かたらず 立てる見ゆ

むれて飛びゆく小鳥あり
 一羽の鳥 悠々と
 今日を惜みて 舞ふもあり
 すべて静けし 此けしき

今夕行

くらき旅路のさすらひに
 秋を二度へしかども
 神の恵にすくはれて
 心もやすしこの夕
 入日のあとのたなざらひ

ひかりもあはき大空を
 茶色もまじる薄雲の
 ちぎれくよ渡りゆく
 まがきに枯るゝ朝がほの
 吹く秋風よそよぐとも
 天幽清のけはひをば
 寂びしといふな思違はん

無題

秋の夕暮に 河邊をゆけば
 水に沈める 夕雲もみね

夕ぐれ

向ひの岸よ 連る藪の
 しげみの蔭は 夜の色なせり
 眠るが如き その静けさを
 見る目は酔ひて 辿りゆきぬ

人いそがしき ゆふぐれどき

油かふべく 巷ゆけば

西空雲の 色ほのかよ

造化妙機の 羽振かるく

見送る眼ざし 清くすみて

心天地の 静穹よ入り

悠々の樂み かぎりなしや

逸題

薄暮沈寥や*生田の森

杉の針葉風にそよぐ彼方

半月玲瓏として清涼を放つ

見よ杳渺の天の中

幾信萬里の達を出でよ

ほのみねそむる星の影を

あゝそは風よちりし火花の粉か

さまよひ出でし螢火ならずや

若しさにあらずして彼の星が

坤輿も過ぐる大世界ならば
我世はいかに不思議なるかな

＊神戸に在り

たゞ友よたゞ友よとて我戀へば何さばかり
と人は笑へり

大神の高嶺もまよふ雲みれば烟はきけんい
にしへ思ほゆ

朝ぼらけ青田をわたる涼風すずかぜも鶏けいなけば家鴨
羽ばたく

閑かある光を浴びてゆく牛の蹄にふれし蒲
公英の花

雨晴れて夕日ぞ照らす瀬戸の海山影さやに
雲のけやけき

雨止みてまだ晴れやらぬ雲間より夕日の放
つ征矢の眩ゆき

喜べよ暗は破れて朝日さすジオンよ我もの
ぼる身なるを(白虹兄よ)

野分

加藤 二水

葉鶏頭やゝ色づきし脊戸口に鶏おいて朝の
雨ふる

箱根路や夕野分の吹きあれて關所よかふる
旅人もなし

落葉松の林に夜半の風吹きて月影凍るアム
ールの河

一ひらの黄金に逢へば虎をうつ力も失する
猛者は世に多し

紫の蝙蝠傘もほの見わてわか葉がくれよ俤
ゆくなり

少女子が夜寒の辻よ三味弾けばそれ門付と
人の罵る

若星の流るゝ見ればみ空よも愁ひを宿す淵
かあるらし

鉢植の桔梗うつくし我妹子はあさな朝なに
水そくぐなり

某君台湾に傳道するときとて

わけ入らば端山しげ山しげくとも佛の道の
通はざらめや

四つの緒の響きゆかしも九つの藝術の神か
君を守れる(暁星子の「四の緒」をよみて)

鎌さげて草刈少女かへり來る朝の暁よ白き
百合さく

水汲んで歸りし妹が黒髪に何時かざしけむ
桔梗よほへり

縦の木よ鴟あきやみて山茶花のほろりと落
つる中庭の晝

散り残る小萩さびしき柴折戸よ雨降るあし
た蝸牛這ふ

神杉の雪吹き拂ふ朝風に羽ばたきしつゝ白
鷹のなく

ひご夜

胡 笳

たぐねたみなり そねみあり
これ人の世なり
しばらくみ袖に涙ゆるすか

血はあり 眼あり

男なり 生きてあり

鏡面の像豈偽らんや

うるはしき哉鏡や

新しき哉我眼や

さても泣かるゝ像の亂れ

秋野ゆく水も樂をなせり

つめたき木枯男々しかり

さてもこれ何ぞ冷骨に似たる

聖者は山に隠れ金市に光る

弱きは袂に三合の糠をつゝみ

まされるは石を抱いて大海に投ず

ほむべき哉 ほむべき哉

世にほむべきは僅にこれ

灯影よ泣くはいとあやまれり

松 籟

(松風會全人)

尼川紫瀾

繪筆とりて無才應舉に嫉みあり舞姫さめな
朝顔の花

夕庭にたゞすむ人の鬢のほつれ罌粟の白き
よ風こゝろなき

寂しかりきさありき薔薇は白かりき夕を十
九のそのみだれ髪

戸よよるよ佐比賣のみ山雲ぞかくす夕こゝ
ろなの人の歡語さびめ

木犀の夕を花の香にいねて倚りしその神み
袖のながき

秀才とや口とき人のさかしらや掩ふに袖の
なかりにし秋(のぶ子女史に)

内田萱村

若駒の蹄の音のとゞろきに花ほころびぬ春
の戸あきぬ

春の海夕日かくらふみ光の絃の調よ水の面
風ぎたる

埋木の埋れて朽ちて醜草のはびこる春とを
りよたらずや

潮汲み眞砂きよめて海人が妻は海幸いのる
年立つ朝

落葉焚く檜の木立は黄昏れて眞白の烟横に
流るゝ

木村紫芳

そとふれし藤の花房紫の色にたぢろく今宵
のねにし

紅とそめ芙蓉こぼるゝ露の夕秋の光の我に
さびしき

白鳩に征矢の傷手を世にあきて和毛とひよ
る人なき秋か

かりそめの一夜嵯峨野の旅やどり柴垣外へ
いぬる子を見し

篝火をかこむ三人の三河武士月たぼろかに
櫻花散る

日野春虹

桃紅淡き春の球雲梅よ來しわが鶯のしとね
つくろへ

雨やみて夕靄せまる縦林虹のよほひよ春を
酔へとや

芭蕉葉を亂り心地に裂きて見つるその夜そ
の子の歌送り來し

萩壺よさて雪洞のふさはしき宵のふり袖闇
にきわゆく

中島秋晚

小雨ふりて夕静かよ花ちらふ加茂川堤蛇の
目からかさ

曙を丸に二の字の帆も見わて海原遠く潮の
満ちくる

北海の氷の上に白熊みわて氷山高く月に浮
ねたり

平和やはらぎの今日のめぐみを讃へつゝ神を見送る
夕映の空

福屋杜啼

苦痛くるしみと忍られし心いつか消ねむ鼓とりあげ
笑みつくらふ子

忍びいでゝ亂れ心地のさすらひよ萩原一里
月となり行く

神代世外

花園よ薔薇の香高き夕月夜寂しからずや君
がからうた

瀧ありと人の教へし山道の右に左に白百合
の咲く

粧なりて姿見に立つ京の子が十四の秋よと
はよ老いざれ

園山白雨

武者一騎小櫻緘うら若う馳せて梅さく庭よ
入りにけり

秋日和つゞく小村の田の面の稻の穂垂れて
動ぎだよせず

塗地に浮ぶ躑躅の花びらを金魚つどひても
て遊ぶかな
齋藤錦水

いでさらば今宵はこゝに宿からん櫻の小寺
日は暮れんとす

三島溪雲

御代ほぐと興がる園の梅の宴白髪の人も少
女も見ねし

旅よして君がやさしきほゝ笑みを夢みし夜
の秋寒かりき

常松含翠

谷川の水さらさらと流れ往きて温泉の岩谷
寺の春静なり

櫻散る山より出でゝ菅笠の順禮三人桃の村
に入る

並河嵩水

瀛車にみる富士の裾野は靄こめて興津のあ
たり灯かすか

久保田松静

猿啼く社頭の杉よ月冴わて佇む雪の夜半し
づかなり

ま白なる蕎麥の花咲く野路ゆけばみ寺の塔
に秋の日うすき

廣瀬曉鶉

本江漣外

夜はふけぬ盲目あんまの笛の音も遙にかり
て雪一しきり

片山芦水

落武者の落ちて往く手の芒原や、黄昏れて
月になりぬる

岡北雲

べツレヘムの清き星影仰ぎつゝ安き我が世
を歌ひてあらあむ

池田弄菫

やさしくも小萩の花の咲きそめて庭よ秋立
つ明方の風

渡邊天琴

山寺の鐘の響は霧にさねて残る二十日の月
かげ淡し

藏田弘毅

夕ぐれを人の歌誦す雨若葉ふと片笑みの眉
うつくしき

野津山冷

月白し卯の花白し明近し門の土橋をゆく人
や誰れ

蛙のせて桐の葉浮ぶ池の端の小萩みだれて
秋の雨ふる

林まぼろし

野坂破月

木枯の荒さむ渡しを薬壘さげて渡る人妻頬
やつれたり

松林紫翠

冬枯の芒尾花に風さわぎ野守が家に雲飛び
てゆく

加納玄一

村長の塗塀つゞき黄昏れて人なつかしく木
犀かをる

能海紫星

緑なす丈のみ髪にくらべてはねにしあまり
に短き惑ひ

大島雪のや

鍬提げて歸る暇に雲雀落ちて十戸の村の夕
げむりかな

稻根松桂

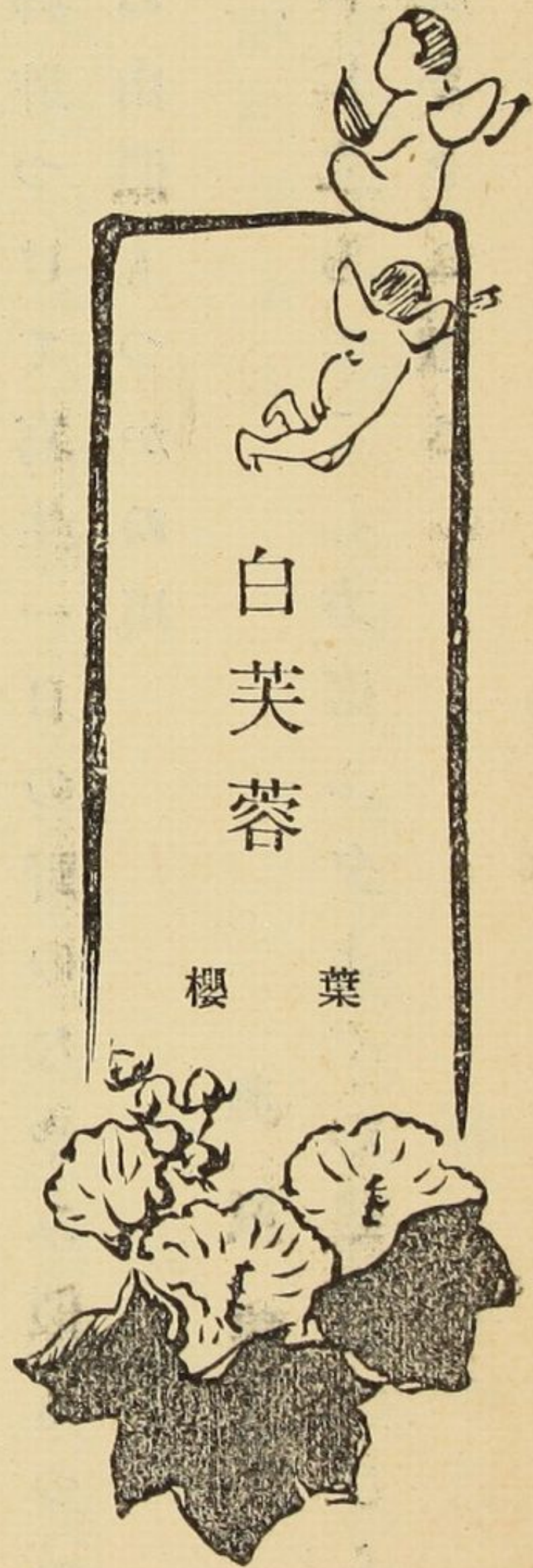
脚胖つけて寫生一日の野のなやみ似もつか
ぬ山似もつかぬ川

奥原碧雲

戸に立ちてこし方偲ぶ夕まぐれ銀杏一ひら
風あきよ散る

今は三年の昔なり
 園の若葉や雨晴れて
 歌よ集ひの日の朝
 牡丹の花をかたむけて
 露翻しやる優こころ
 浄きすがたよ夢のごと
 灯消いなむたもひ寝を
 哀れと君は訪ひませり
 芙蓉に薄き月の夕

君へ瀧村いふ子より
 千代の紀念と寫眞の
 裏よ香るや墨の色
 涙に更くる秋雨の
 芙蓉に寒き夜半あれや
 君を偲ぶにたねがたき



窓に芙蓉を手折りては
幸なき運命なげきつゝ
君と一夜を泣きわびぬ

ものだに云はぬうつしるや

君十八の竹の春
我れいたづきの床に見る

悩みは長し夜は深し

軒の蟲籠聲たねて
芭蕉やさわぐ庭の雨

こぼれ梅

曾田竹似

鎖したる濱邊の小家傾きてま晝しづかに桃
の花ちる

青戸胡笳

我が生命封じてこめて大かなる甕もたひそのまゝ
犠牲とし捧ぐ

廣崎琴江

眞帆片帆沖よかすみて磯際に春風寒く波の
寄せ來る

大脇變哲
辛夷花咲きぬ鯨近しと勇み立つ海士が鬚面
春の風吹く

春木雪樓

高き香の伏籠を洩るゝ夜の室よとき髪長き
人のうたゝ寝

椋木寒江

袖ふれて銀の小扇水よたちぬ桂の川のゆふ
すゞみ舟

田邊白蝶

玉の如も白き額よ亂れたる人の前髪なづか
しの春

松原葉櫻

青柳の門よイむ夕づく日かあたは西よきみ
居ますところ

飯塚雲水

徒らよ秋のみ月といふあかれ花に暮れゆく
彌生の夕

田邊薔薇

滅亡^{ほろび}いま君を捉へむ罪すてゝ十字架の血を
仰げ世の人

柴田柴雨

ほの闇き森をもれくる妻琴のその音もゆか
し住むは誰が子ぞ

小羊の平安やすきを夢に白露のもろき運命を野路
よくるへる

高山安子

里なれぬ聲たもしろし昨日かも巢立ちやし
けん園の鶯

緑川静子

さいへきみ小さき願を許さずと許さずとい
ふ神のたはさば

若松要子

夕風に波さどめきて白蓮の花はくづれて翡
翠のとぶ

片山春子

漕ぎくだる小舟霞みて川岸の柳の糸のゆる
うみだるよ

藤枝房子

少女ふたり振分髪をなびかせて梅の花園羽
子つきかはす

紅芙蓉女

うら若き妻を厨に泣かせたきて國の政治まつりを
あげつらうとや

鈴村輝子

天つ女はろの羽衣を濯ぐらむ清き流れのヨ
ルダンの川

かくて榮はぬ莖の色の春淺き今日を胡蝶よ
恨みの若き

中澤幸子

殘光餘影

ナル
虹
生
ス
譯作

虹

かの大空に虹影を仰ぐ時
我が心うちよ跳躍するを覺ゆ
わが生が始まる時かくありき

いま人となりてかくあるなり
願ふ老者と成らん時かくあれかし
然らずんば我をして死せしめよ

苺入れ女

みよや少女を野末はるかに
寂しく立てるハイランド女を
とまりてさらすば靜に過ぎよ

獨り苺りつゝまた歌ひつゝ
苺りては束ね束ねては歌ふ
調べはきよく愁ひを帯べり

聞けやその聲谷をどよもし
小山を越わて餘韻かすかよ
夕ぐれどきの空よ消ゆゆく

かのアラビヤの沙漠のたぐなか
椰子の木蔭に憩へる人にも
うぐひすかくは歌はざりしよ

船路はるけきへブリデス島
その海濤の静寂をやぶる
春の杜鵑もあよまさらめや

告げずやわれよ少女の歌を
そは遠つ國かのふるき代の
幸なく逝ける子の爲めあるか

あるは戦争の場にのぞみて
譽ある死を遂げし猛者をば
かくは悲しく歌ひいづるか

世にありふれし俚謠なるか
憂ひうしなひはた苦しみの
そぶろ心のすさびなるよや

さもあらばあれ少女は歌へり
さながら雲の絶へてはつゞき
またちぎれてははてしなき如

鎌とりあげて腰をかゝめて
はたらきながら歌ふ少女を
吾は眺めぬ飽くまできゝぬ

かくて歩みを丘邊に移して
登りしときまで吾は久しく
いみじき樂をむねゝ宿しぬ

低 唱

(三葉會全人)

松原葉櫻

狙ひ寄る若き牡獅子の目の色の冴ゝ動せぬ
主にある少女

竹垣や紅梅白梅花ちりて庭は静かよはるの
あめ降る

春寺のねばしま近うわなゝきて髪みだれた
る踏繪の少女

木蓮はさめて碎けて朝まだき牡丹の花はや
やひらきたり

梅やせて庭石さむき結垣の葉蘭のかげよ雪
消ぬのこる

牡丹剪つて明日贈らむの思寝よその夜その
花碎けしとみき

筆を抛げて春の夕や悩みあり此の子何すと
世に生れこし

そごろくむくろぬけいで牡丹花に蝶と狂
ふか春の魂

誰ぞ料紙もてとのみ聲もれいで寮の灯匂
ふ紅梅月夜

蛙なく櫻小堤の暗くして小雨ふりでむそら
氣合なり

櫻ちる小堤にたちてみかへれば七堂伽藍月
ねぼろなり

結垣に卯の花咲きぬ子規啼くや結垣卯の花
咲きぬ

軒ちかく檣咲きけり軒ちかく長者が庭に檣
咲きけり

花落ちぬ小草の榮に花落ちぬ人やまぼろし
小草の榮に

春木雪樓

狩衣やかづきの人の足ゆるし朱雀大路の春
の夜の月

夕月よ源氏の巻をよみさして君よし琴を乞
ひまつるかな
舞やみて紅の扇をさとなげし月の高殿人う
るはしき

扇流しだにだら染の袖長き二人すぎゆく祇
園の月夜

層樓の高きを仰ぐ春の夜よ被衣の人を月と
香に見る

紙燭して月の廻廊わたなゆく人の黒髪五尺風にゆ
らるゝ

拾ひ得し人の歌反古すかし見る月の廻廊春
静かなり

高樓よ舞ひやみはてし春の夜を月に人呼ふ
聲若かりし

くしけづる君が五尺の黒髪よ梅ちりかゝる
朝の小窓

舞姫の衣をたさへて春の夜を小鼓拍てと強
ふる廻廊

あらゝぎの夕白梅そとちりぬ月のたばしま
朱丹のあせし

花いけの紅梅ちりたる春の夜を十三絃の響
さゝやか

鳩を呼ぶ窓の紅梅手にちりしうら若の人笑
み美しくしき

さげ髪のあな美はしや戀と云はでリボンを
結ぶ紅梅の君

西村松雨

アラビヤの野の豫言者の聲たわてゆく水悲
しゆく雲寂びし

たばしまは鶴の綿毛に埋れて庭の小笹の重
たげよ見ゆ

柴の戸を出でよ眺むる波際よ降り立つ鷺の
寒くもあるかな

椰子の葉は夕日のかげに彩られ地平のはて
よ物動く見ゆ

いつしかよ我れ髪はへぬ年ふけぬ二十此の
冬頬撫でよ泣く

野の花よ氓滅ほろびの吹息いぶきかゝるとも我が優歌は
とはに榮さかなむ

井川天籟

花清きこの野此子の歌よ酔ひて牧場の牛の
夢まどかあり

日毎來る親の雀の憐れさよ放ちてやりぬ籠
の小すゝめ

貴人あてびとのみ莊やしきたかく聳たかね立つ梅よこの村水ひ
やうけき

白き蝶萌黄の蝶の舞衣の夕日にはゆるみ階
のほとり

小野一里松原一里山一里たどりて往きて白
梅ばやし

瑠璃の殿朱の欄月の園牡丹くづれて姫たも
ひあり

安部馨苑

見ぬ手に導かれ來し葉櫻が歌ものがたり
たび物語

げに斯くも輝めく衣いつの間に誰が汝に着
けし輝めく衣(以上二首葉櫻よ)

迫害せめ罵詈そしり欺瞞あやまふよぞ我が笑みの愛の熱炭あつひよ
焼き盡さなむ

いやたかく懸りし虹に聖顔^{みかほ}てり荒野に迷ふ
我れを慰む(白虹の君よ)

飯島二喬

白梅の散りて亂るゝ宵闇を君かあらずか柴
折戸よよる

聖き崇き歌の道こそたごるべき天に新星地
に堇草

米村水聲

春の日の陽炎の如消えし子が新墓のべよ堇
咲きよけり

馬洗ふ小川のほとり黄昏れて畑に鶴鴿鳴か
すなりぬる

森山黙笑

過つて袖よ散らし鉢の梅に叱らるべくも
あらぬ妻若し

送るべく水仙剪りて歌かきてさてためらひ
て碎きて捨てし

吉田曉星

罪の子の明日は氓びよゆくべき身さかしら
今日を猿の饒舌

雪寒き朝け小堤よ菜を洗ふ少女に近く鳩浮
ぶなり

富田凍泉

井原雪江

立ちよれば櫻の音やみぬ妹が家の桃の花垣
櫻の音やみぬ

山口菊伴

うきつらき苦しきことの數々を重ねてあふ
ぐ十字架の人

西 枯 萩

石をもて碎かれむするりの顔よなほも溢る
る平和と歡喜よろこび（ステパノの死を憶ひて）

鳩の歌

小林吟月

ねにしははやく神の手に
結ばれにけむ鳩の子の
わが軒ちかく巢をあみて
われよあはする歌のふし

夕の空の光彩あかりわけて
翅も染まりかへるとき
興のさめたるわが笛も
そどろとり出てしらべけり

朝の嵐のあらはれて
 胸毛もそよぎ出づるとき
 かみてすてたる歌筆も
 そらる吾手にとられけり
 球よも似たる眼をあげて
 夕の星を仰ぎては
 なが生れたる花深き
 み空の國や慕ふらむ
 朝の日影のやはらかよ
 紫金の翅を彩れば

美しいかな汝がせに
 のりて來ますか春の神
 大空たかく領を得し
 かのつよきもの荒鷺は
 八重の天雲蹴やぶりて
 猛き暴風と戦へよ
 静けき暮をわれとともに
 神のたまひし美しい國
 ところら若き平和の
 光にしばしあこがれむ

壁 畫

夕雲とざす丘の上高く
 古びし伽藍の影はうかべり
 草蔭小ぐらき小徑こみちをたづねて
 星の光よからくものぼれば
 いたましいいかな、荒れたる面影
 破れし戀の末よも似たり
 いくちの戦ひ、風雨あらしはかちて
 金碧空しく土にうもれぬ

檜の樹しげれる窓より覗みれば
 ほのめきそめしかたわれ月の
 か青き光をなげたる壁に
 薄闇つんざく光は何ぞ
 聞く、その昔ならざる戀に
 若き血みだれし畫匠えだくみひとり
 煩悶わだかまにさすらふ旅路の夕ぐれ
 しばしの宿りところよ入りしが

狂へる血潮の繪筆にもわて
壁よなりたる牡獅子のかたち

ますます燃わたつ思ひにたねで
一夜晝だくみ白刃ハに伏しぬ

白刃よ伏してうせにし時より
恨みよ輝く牡獅子の眼光まなざし

夜深くなれば風雨をよびて
空もどろろよ哮ゆとぞいふなる

病牀雑詠

白虹

壬寅初夏より秋にかけて病臥百余日、昨
年の春よりこれが三たびあり。

我が口よみとせ絶わざる祈禱いのちあり自由獨立
ツランスパアル

鑿とりて天つま柱飾るべくまづ刻む名は牛
飼クルーゲル

いとせめて石とならばや平安やすらぎの神のみ姿刻
まむ石に

角筈はみ邦のナザレその村の櫟が岡に師の
きみ居ます

誘惑の征矢ふりそくげ降りそくげ現世快樂
の仇われこくに

世よ倦みぬ戀よ疲れぬ今ゆるせ神秘の帷か
かげて去ちむ

げよさなるかこれ惑とよげにさなるか今宵
みことば余り冷き(つめた)(曉星子に)

戸に倚りてあれあの星の聲きよし主は處女
米利堅の人

いかなれば西と東の遠きごと君が想の我れ
のに似ざる

落瀧津玉と碎くる岩のうへに髪ときささばき
立てる誰が子ぞ

花どきを上野にゆかず隅田にゆかず戸山が
原に富士を眺めぬ

黎明の蓮すゞしき池のたも辨財天はもやの
うちなり(以上三首ともひで)

牧場ある小羊われは情もつたゞ口笛の主を
しるのみ

人よ人よなどかくつらき蹴押されて底なる
闇に沈む子なきか

病いと篤かりけるをり

人かつて自由意志なるものゝしや命運の轍
走るに似たり

わづらひの二十四年を願て今昇天のわれに
悔いあり

いとせめて高き理想の宮殿のその祭壇の犧
牲とありなば

罪多き過去を葬り今日よりは感謝の生に入
らむとぞ思ふ

翼なき我がペガサスは若ければ未来の春に
生ひ立たしめよ

希臘や羅馬や遠くかへりみて興亡の理をた
づねしや人

政府あり軍艦ありて日の本は建てりと思ふ
人こゝろせよ

望み見て耻ぢよ國人朝の富士夕の富士の姿
きよきに

聲あげて時世のゝしる人はあれど民救はむ
の涙涸れたり

我深く病めるを耻づ、然れども是れ
事實掩ふべからざる也、數首を咏じ
て「后の誠とあす。

病むわれよ猶歡喜は溢れたり謳へ鶯啼けほ
とゝぎす

黙想の夕ぐれどきの静けさに頭もたげて空
のぞみ見ぬ

詩集あまた聖書ひと巻枕べよ積みかさねあ
り寂しくもなし

絆なく死を畏れざる身よしあれど世に功績いさを
なき身をいかよせむ

東都ある二水兄、書を寄せて余が病
状を問ひ、併て床中の慰めにもとて、

『せらぎ集』一卷を送り來る、集はそ
の友、泉郷子の著はすところ。

大方の友はそむきて去れるうちよ我名忘れ
ぬ君もありけり

新らしき詩集ひと巻枕べに添ひたるがいと
嬉しと思へり

家の人寝しづまりたるま夜中に集よみ居れ
ば啼くほととぎす

『せらぎ』のその名よ負へる叫びに生命の琴
の響をぞきへ

幸にこころしたまへ塵のみの都は靈の砂漠
とたもふに

安らげき想ひ静けきその調べ命を知る人泉
郷子あり

遙かなる都のきみが平安を祈りて今日のよ
き日鎖さむ(以上二水兄に)

時しあらば君が想像えいる草の屋に灯かゝげて
歌がたりせむ(集中「我が想像の草の屋」あり)

野の川のほとりゆきかひ夕暮を詩想うたふきみ
詩の幸あれ

ねがはくは讃歌の聲を絶たざらむきみも巡
禮われも巡禮(以上泉郷子の君に)

つみどれる花の多きを誇らひし穉な心をう
れしと思ひぬ

花剪ると登りし丘のかへり路をわれこまら
せし人のたも影(以上二首ともひで)

人の世にきみ慰藉なぐさのことば知る男の子暫く
魔と争はむ

無才われにピアトリチエの名あらば地獄巡
りもあはていなまじ(以上二首人に)

慰藉はみ空よこそと思ひしを人に負ふ身と
いつかありけむ

かにかくの筆を暫く收めたきて人の心の朝
をまたばや

瘦せよたる腕を組みて目を閉ちて想ふは杜
國農村の暮

君によりて起たば起つべし驕おこりの世傲たかぶりの世よ
何ぞ堪はんや(人に)

『ウエルテルの悲哀』わらわいたきて二の君の毬たまごに興おこね
ぬ紅梅の窓

草わか葉踏むや細靴足輕う蹴鞠けまりにきそふ子
らのひとむれ

花藍を脇よはさみて朝霧の十字のちまた市
女小走る

燦爛の舞踏のまごひ更たけて樂手の君のら
うたげたゆげ

甘きその葡萄の房よ狙ひ寄る栗鼠の目細う
優しうつくし

凝りなせる雲の粧ひきらゝかよ日のみ駕くろまを
今か迎ふる

我が歌よ耳かたむくる子もやある新星今宵
胸に入るとみし

しばらくの快樂を地に抛ちて天のかなたの
母國をのぞめ

花よ泣く似非風流男は策に充ちてつひに義
憤の徒ひとりなき

迫害せめなにぞ誘惑まよなにぞ世のかぎり苦き盃味
ひてみむ

あたらしき慰藉の國拓くべくしばし許せあ
懐滅の斧

病や癒わたる日よめる
天や地や此子容るゝよ寛かありいつの日い
かよ報いまつらむ

花環

鈴村輝子

白綾よ賜ひし君が清き歌そとる心にまた誦
しいでぬ

世の中に我を仰がぬものなしと語りて誇る
人の子あはれ



白梅の花の一枝を手にとりてきみがみ歌を
乞ひまつるかな

あさけある母の恵みの埋火よ寒さ忘れて英
書を讀む子

幸あれな榮あれなど君がため祈る妹の瞳の
うるみ

雛鶴の鳴く聲りれも寒げなり遠里小野の白
梅月夜

塵の世の境のがれて白薔薇の花咲く蔭にホ
ムつくらむ

白薔薇の花環つくりて亡き人のみ墓の上に
のせて歸りし

香に匂ふ白き薔薇の白き如清くあれよの臨
終のみこと

若松要子

山櫻かつ散るかせの柔よ吹くや川堤くさ萌
ゆるらも

立琴よふれむもいと興あしや心をぐるの
春の夜の月

ともすれば忘れ難なに惑はるゝ君を見つる
は如月七日

人の世の戀とないひそ春の野面花よ酔ひた
る若き二人よ

少女いま琴に興得てかなづればたねに響く
や羽衣の曲

なるふるや牡丹ゆらぎて花散りて翅みだる
る白蝶黄蝶

木蓮の花のゆかりに恨みあり十九を幸あき
草ずり

衣春寒し衣重ねて聖書よみて歌よ祈禱に慰
めよきみ(白虹のきみよ)

藏田信子

若き子をこゝに泣かせて連翹の雨となる日
を君去あむとや

聞いで今蓮にたつ朝姿うたよあれかに笑
うるはしき

芭蕉葉よなよすともなく佇めば小雨となり
て鐘の音きこゆ

近江路へ人を見送る小松原松原一里鐘ひく
うなる

合宿の人晩酌のほろ酔ひ土佐の投節聲う
るはしき

藤島春子

春の野に童子夕を息白く吹く笛の音に去りがたき思

月細く君がとる笛音ぞよきに合せ奏でむわが吾妻琴

吹く笛の調べの亂れ天雲をなやましけめかそのたゝすまひ

雨もうて風もあらびよ野の末に髪を亂して低き雲見る

なやみ今肉よ顯形の子を泣きて招きの聖書ふみに人の笑ひや

白芙蓉女

今宵きみが病ひの床によりそひて語らばんかな旅物語

身も魂も神と人とに捧げつゝ生命いのちの水を撒く人や誰れ

小泉花子

歌がるたさどめきやみて次の間よ衣のさやぎの人若げなる

南殿の花の御宴うたげのたけなはよ大路の柳月さ
しのぼる

片岡君子

薄き日や畑の紅梅ほころびて人なき椽に小
鳥あそべる

窓帷の紫古りて卓の上の薔薇白さがやく萎
れたり

中澤幸子

いかなればうつむきがちの我性にかくはつ
れなきみ歌賜ひし

女の童料紙さくぐる紅梅の春のた庭にうぐ
ひすのころ

藤枝房子

亡き君が紀念の堇咲き出でゆかり紫のいろのな
づかしきかな

破屋の軒もる月の影冴ねてあけがた寒し白
梅の宿

蒲原貞子

餌をやると朝け比丘尼の笑み若うみ寺の椽
よ白鳩を呼ぶ

遠山はかすみたなびき柴垣よ白梅咲いてう
ぐひすのあく

岡 珠子

人訪へば人はあらく庭前に楓紅葉のはら
はらと散る

植田春子

朝菜つむ少女の袖にふりくちり花よりかろ
き春の淡雪

棕木錦子

花は散れどまた來ん春よ頼みあり君が秀眉
いつか見るべき

西田京子

朝なく空晴るゝ毎曇る毎君が船路の思は
るゝかな

津田邦子

ひと夏は君のみ歌にふれざりし秋は芙蓉よ
興そへたまへ

古能糸子

茸狩のかへさに乳母の宿とへば無花果あま
た我に興へし

西村春子

枯萩の折れ葉そよぎて風寒く入江しづかに
日はくれんとす

葉田綾子

野のこゑ

白虹子

紅さめて夕照は
 匂のみなるそのほとり
 活ける泉の香をしたひ
 遠く流るゝ天つ領巾^ひ
 みるめかなしき緋の裳の
 色いたづらに薄れつゝ

あゝ幽静と深黙と
 夕の思ひ胸に充つ
 雲飄零の秋の暮

天の莊美を夢みつゝ
 われ人生の巖よ立ち
 沈む入日を眺むれば

潮はさびし荒磯蔭
 浪のしぶきに襲はれて
 むら立ち噪ぐむら鳥の
 蘆葉を離れ散るがごと
 愁心すゞる湧きのぼり
 はふれて落つる涙かな
 迷ひの狭霧とちこむる

懐疑の洋に漂ひて
 こゝらさすらふセータンの
 劍紅蓮よてるところ
 號笛高く呼ぶところ
 血染の旌のゆくところ

怨みの翼、夜の色

やがて星をも包むとき
 怒れる潮沈みては
 またも逆捲き狂ふとき
 陰府より起るをたけびの
 海をさよもすその響

大塊碎け飛びしより
 たのづからある調もて
 命運の琴を奏でいづる
 万象とはに渝らねど
 渝れる境遇の姿いつ
 墮落の歌を孕みけむ

かれ憤懣の斧を振り
 かれ愁々の曲を爲す
 誰ぞや自ら苦みて
 誰ぞや自ら縛むる

狂亂の舞いつまでか
白日の夢よいつまでか

遮莫、義を惡み

とはに逆ふ心根は

冷熱いづれ定めぬ

男にまさる力あり

みよ誘惑が檻のうち

充ちて溢るゝ魔の族

たそろしきかな若人は

生れながらに怒の子

野ゆりのうちよ羊群を牧ひ

葡萄樹の葉かげ小狐を

索むるやさしまなざしの

愛する伴侶のゆくへはも

いたましきかあ少女子は

うたげの犠牲か禍津日の

見ずや凄風慘雨の夜

すすぶ落花の音になけば

高樓絃歌の聲たけて

闇にきらめく舞の袖

高樓絃歌の聲たけて

闇にきらめく舞の袖

それ橄欖樹露しげく
 花かぐはしき蓮葉は
 晨すどしく戦げども
 無邊の砂を捲き來る
 劫風とみよたらぶれば
 雲枯れ牧場泣き號ぶ

北斗は繞る地の極み
 鎖すは何ぞ巨岩の
 魂濁浪に犯されて
 死蔭の谷に驚けば
 いかづちの音か木枯か

奈落の叫び凄じや

呪咀の森に鳥謠ひ

魔毒の淵に魚躍る

熱沙にしるす「人の子」の

足痕いつしか消失せて

異象を趁ふ詩人の

憂愁はつきす世々の聲

あゝあゝいづれ浮雲の

われは無限の天の旅

行手を飾るピタゴルの

大立琴の弦つるにしも
觸れて情の露と散り
落ちていさごに宿らむか

始めながらに彩いろ虹にじの
萬古に亘り動かざる
誓ちか約ひのかためかふるみば
潮は高く胸を撃ち
嵐あらしむくろを破るまも
不羈ふきの翼はひるまざれ

舌は火を呼ぶ

野のこゑの

遠こだまして

いまこゝよ

世は壊滅の

まへにあり

雀よ與ふ

夕暮どきとなりぬれば
裏の小藪に丘の上に
雀らあまた歸りきて
今日の勤めや語るらむ
囀る聲のたのしさよ

時もとめて安らひて
 ひと日の疲れ癒やせかし
 よしやめざるとき梟は
 木の間爪を砥ぐとても
 汝が夢破ること勿れ

たとへ夜の鳥襲ふとも
 なれ天命に従ひて
 野原よ山よ働けり
 疾しきとのあらざれば
 地獄に墮つることあらし

夜の幕さけて曙の
 光かすかに匂ふとき
 翼羽ばたき飛び去るも
 夕となれば歸り來て
 楽しき歌をきかしめよ

短笛長鞭

青戸胡笳

鞭とる子まづ大空を仰ぎ見よ溢るる色はオ
 リブその色

雨を見ざる彼方沙漠の空に飛びて乳そぐ
べく翼を許せ

春無才歌はみやび男市よこそ吾は犢よ草は
まする子

木を刻み金の箔塗り宮殿よ据わ已がたくみ
よ額くやから

炎はよとや我靈消ゆる夜の床を圍みて叫ぶ
エリヤにヨハ子

一切の罪と道とを爐よ投げてうまるの朝の
雲を見るかか

花や葎や葉すれことごと樂をなす諸手の草
に圓き地埋めむ

月淡し何の恨みぞ秋の湖水^{うみ}面^の十里はさ搖ぎ
もせず

見る限り色なき花の眺めよの歎きもいはず
石よ凭る秋

火の氣なき聖燭ごろうしび永く野に癢れまぼろしを逐
ふ人の命いのちや

○身を靈を胸を一時に喰ひ破り出でむと我を
苦しむる虫

悩みある今日を葬り朝雲の榮はのよき日を
迎へむ祈禱

驕慢たかぶりの都大路を肩昂き大臣よ人よひかりを
知らぬ

○身此まゝ悩みつゝみて火よ入らむ靈よのが
れて喜び享けよ

工匠たくみ今鑿くに興おこわて刻くみたる宮殿みやの柱はしらの無花
果模様

白虹のためにいのる
苟くも我よ許さむ生命あらば泣く子彼の子
に幸たまへとぞ

流るゝ血落つる涙をみそなはせ真理まことに泣け
るかれ罪の子ぞ

さみのみ前首を俛るゝ優しの子かくても幸
の光みずとや

「たゞ信ぞ」彼かくありき斯くて今は病の床
に只み手をまつ

肉を病みて彼みとむるは黒き蔭こゝろみ彼
よ應はぬ恨み

こゝろみはいや繁からむ願くはかれにそふ
べき力給はな

小林吟月

春の夕日うすくさし入る瀧壺よ小さ虹のた
ちては消ゆ

鶯がさくなきかはす聲ごゑの珠としづむか
花かげ清水

うら若き戀のふたりが通ひ路にま萩花ちり
月照り渡る

宵月よ人うつくしき京の山花ちる風よ春さ
むからず

湯あみして出でたる君が花笑みの細眉なぶ
るはつ春の風

鶯のほそき羽風よ梅ちりて寺の朝庭雨しづ
かあり

若草よこもれる魂の迷ひ出て春野の風よ蝶
と飛びゆく

夜ふけて筑紫緒琴の音ぞたかき灯よそよぐ
白梅のかをり

荒れはてし伽藍の園の木がくれに落ちゆく
春の夕日みたくる

白き象にのりて來ましと神ありと見たるは
夢か春の日永き

わが立てることしき岩の岩が根ゆ七國かけ
て虹たちわたる

寒椿ひと花落ちて流れゆく谷川清水ゆふべ
みぞるゝ

大城^{おほ}戸^きの白^か壁^べよ夜ふけの月うすし高きやぐ
らよ笛吹くは誰ぞ

水濁る黄河のほとり雲たれて遠き草笛人い
たましむ

羌笛のひびきは細く雲よあり賣^{アイ}買^{マイ}城^{チン}のあけ
がたの月

ある夜そと詩^か神^みのみ袖をもれいでよ我世の
花に咲く春の風

ゆかしさの君がみ袖を吹きすぎて初めて春
の風はかをらむ

雨にこもる嵯峨の山里ながき日を讀みくら
しけり桐壺の卷

五百重波天つみ空をたふみくる天草洋やわ
が舟小さき

思ひかねよる欄の萩の風秋は寂しきものに
ぞありける

奥原碧雲

馬曳いて橋を西への馬子二人やせたる影や
蘆の日寒き

紫の葡萄の蔭に身を寄せてたもひよたねぬ
秋の夕ぐれ

燕飛びきぐすしばあく今日もまた夕は雨に
ならんとすらん

思出のその美はしのひと時を忍ぶに寒き夕
ぐれの鐘

ひとり居の水の欄干月になりて藻の花白し
黄昏の秋

結ひなれぬ島田をたもみ銀屏のかげに只な
く耻かしの夕

さればとてか弱き子なり女なり蘭燈ゆらぐ
銀屏のかげ

羽織ぬいでそとうちきせてせの君の寢息守
れる人うるはしき

松本 苔花

我が宿はた城のま北するが台富士の眺めの
朝夕によき(以下駿臺雜詠)

相對ひがひふ九段の岡の上にして空に描ける富士
はあざやか

わが室は崖よのぞみぬその下は神田の巷火
事多きところ

下町のほこりが中に一むらの常磐の木立住
むは誰が子ぞ

下宿屋の二階にせまる藤棚の藤豆くろくか
らびたる冬

軒端ちかくからびてたれし藤豆のわれては
ちけて雨戸打つ夜は

日の程の嵐はやみて下町よ灯ともす頃の灯
の色寒き

富士とほき窓にゐ寄りて朝まだき都大路の
松の内みる

庭先のを笹の葉末霜とけて冬あたゝかに蜂
とびまはる

皇城の日和よかすむ森のつゞき白き烟たち
午砲どんならんとす

師走ちかき都の空を北むけて雁なき渡る朝
な夕ゆふかに

崖の木は冬枯れたりやた茶の水のか黒き上
を客船ちさき

林なす砲工廠の煙突のけぶりのするに秩父
冬枯れぬ

ニコライの金の十字よ夕日てりあすも晴な
る武蔵野の冬

妹がならす琴をゆかしみ御茶の水の橋よた
く霜君いとほざりき(憶中野逍遙)

琴のぬしの天がけるとき茗溪の怨兮歌ひし
詩人逍遙

蝶よ與ふ

苔 花 生

黄金色なる花の上に
 なれを見つむる半時間
 小き蝶はいねたりや
 物をはめりや我れ知らず
 さゆるぎもせぬその様よ
 氷れる海のゆるがぬも
 これに過ぎじと思ふなり
 そよ風やがて木のあひよ
 汝れが姿を見つけつゝ
 ふたゝびよそに連れて行く

ろの時何のたのしみか
 なれを待つらん聞かまほし
 こゝぞ我等が果園なる
 妹か花に我が植木
 疲れてあらばあれよ来て
 翼やすめよかくれ家の
 安きところと宿もどれ
 恐るゝ事もあらざるよ
 蝶よ來よかしあまたゝび
 近くしづ枝にあれは居よ

我等二人は語らんよ
 照す日影とひな歌と
 若かりし世の夏の日と
 ひと日は今の二十日ほど
 永くてありしそのかみの
 幼き頃のたのしさを(ナルツナルス)

光
 暗

青戸白虹

『君の病が日々怠ると聞いて、祝せざるを得ぬ。此の國はめしひ住む國で、暗の國ではあるが、しかし死ぬべく急ぐ氣

にはなれぬではないか、天國は我等の理想ながら、それでも下界は、捨てられぬではないか。』曉星子が書翰の一節

夢といはじ流轉しはしの世といはじ幻ならぬわれ現の身

神しばし生命ゆるせなペン執りて世にのこすべき我が思想あり

歡樂と自由はかなた天津國この世くるしみ歎きわづらひ

○翼にてみ空翔らむそれまでは働けたのが力
のかぎり

天あめきよし地つちはうるはし萬物の靈の長ながある人
けがれたり

名なといはず榮華といはず戀こひといはずわれ現うつし
世よの快け樂らくいやしむ

わが神は地獄つくらすこの世にて快樂趁ふ
子が築くといへり

迫せま害がいたまたま歡喜よろこびを呼ぶ鞭むち笞ごのみきみは佛ぶつ
陀だの子我は神の子

此の國はめしひ住む國闇の國我も住む國光
そゝがむ(以上九首曉星子よ)

只信ぞ又何かあらむ病む友よ笑め理想の火
呼ばゞ降るべし(星浪に)

願つべき富も權威もあらぬ身は胸にひそめ
る靈の火をこそ

一切が轉倒の世ぞ終まで忍べ譏笑の的となるひと

屋を出でよ仰げ蒼穹その上よ頑陋の人あり
としも見ねず

それもよし倦んじ果てたる君は身は説くか
世の寂び遮莫さもあらはれ

苦みを歡樂とせよ現世はこれ天の幸いとゆ
たかなる時

ひたすらよ浄土の花に憧れて忘れ給ひし彌
陀の誓願

靈の子火の子日蓮きみに生きずむば優男と
のみよ笑みて終らむ(以上四首曉星子に)

憂愁煩悶苦楚たねし朝の戸よ淡紅色の雲ゆ
るう流るる

ひと度は陰府を巡りし我等よりなど天上を
飛ばであるべき(星浪兄よ)

燭剪つて若い子明あ日の理り想ががたりゆめども
いへな何か怕れむ

我やはた枯野の小草名なし草蹂躪ふみられてあ
らばありぬべし

夕野路の小草よ臥する暫くを火もて飛び來
るセラピム、ケラピム

一挺の鍬だにあらば足りぬべきを名よゆく
男戀にゆく女

神の像かたよかたどられたる軀むくろもて何語はむ金
力威力

〇懲らしめか怒りか火もて硫黄もてわが煉獄
はわれよ尊き

橄欖のひと葉ひと葉の戦ぎよも時か迫ると
驚かれぬる(ゲツセマ子よある主を憶ひて)

鞭しもこ韃しもこくはへ荆棘冠いばららせあなかしこ地獄めぐ
りを強ふる我が世か

名なし石隅の首石犠牲の石こゝにか靈の宮
殿は建つべき

人の子が終の審判の日の朝朽つる朽ちざる
消ゆる消にざる

落 穂 集 終

明治三十六年三月二十二日印刷
明治三十六年三月三十一日發行

定價貳拾五錢

編輯兼
發行者

青 戸 博 幸

島根縣出雲國八束郡津田村大
字西津田千二百九十八番地

印刷者 小豆澤 勝 良

全縣松江市外中原六十五番地

印刷所 松陽活版所

全縣松江市殿町四十三番地

所 擲 賣

全松江市末次本町
全殿町

有田支店
川岡年舍

